

孙毓汶印全集

第一卷



谷崎潤一郎全集 第一卷

定價一五〇〇圓

昭和四十一年十一月一日印刷
昭和四十一年十一月十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 宮本信太郎

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二二
振替東京三四

目次

誕生

象

The Affair of Two Watches

刺青

麒麟

信西

彷徨

少年

幫間

颶風

一

二七

三七

六二

七三

九二

一〇九

一四三

一八七

二〇九

秘密

惡魔

あくび

朱雀日記

羹

續惡魔

二四

二七

二九

三

三九

五九

誕生

一幕

明治四十三年九月號「新思潮」

一條天皇の寛弘五年九月十一日朝、京都藤原道長邸に於ける出来事とす。舞臺中央に華麗なる土御門寢殿の建物ありて、其の兩側の簀子より對屋に至るべき渡殿の一部、翼の如く左右へ突き出づ。寢殿正面の簀子より庭へ下りる階の左右に、さ、やかなる梅樹各一株、庭上處々に菊其の他の草を植う。殿上悉く格子をとざし、四隣寂寥。唯庭にすだく蟲の音に紛ひて、室内より多人數の讀經の聲々。鈴を振る響など洩れきこゆ。

年若き女房二人、(以下登場の公卿女房達は、宮中御産の古式に則り、白無地の服裝を用ふるものとす)ねむたげなる顔して妻戸の中より現れ、一人は階に腰うち掛けて、一人は勾欄の下にうづくまりて、眼脂を擦りつゝ空を仰ぎ見る。

女房の一 おゝ、いつの間にか空がしらんで參りました。もう程なく夜明けでござりませう。

女房の二 此のまあ、朝風のひや／＼と吹き入る心地好き。込み合うたお局の人いきれで蒸された頭が、一時に冴え／＼とするやうな。

女房の一 暫くお靜になさりませ。前裁にすだく蟲の音が、何處からともなう、ぢいぢいと聞えて居るではござりませぬか。

女房の二 如何さま此處にかうして居りますと、あの御讀經のこゑ／＼や、陰陽師の振る鈴の音までが何となく蟲の音のやうに哀れが深く覺えまする。

女房の一 それはさうと、後の宮には疾うに御産氣づきながら、あのやうに、五壇の御修法やら、不斷の御讀經やら、山々寺々の大徳、いみじき修驗者の數を盡して御祈禱遊ばす効もなく、未だに御産を遊ば

さぬとは、どうした事でござりませう。

女房の二　ほんに、ほんに、御産の苦しみは上つ方も下々も同じ事とは申しながら、後の宮はまだいたいけな十二のお歳に御入内遊ばし、今年やうやう二十を一つお越し遊ばしての御初産。勿體ない、あの花のやうなあでやかなお身で、このやうに御悩み遊ばすかと思へば、いたいたしうてなりませぬ。其の代り、めでたく玉のやうな男皇子をお産み遊ばして御覽じませ、やがて帝の御位にそなはり給ひ、後の宮は云はずもがな、お父君の大殿の御威光も天が下に輝き渡るは知れたこと。

女房の一　さあ、ならう事なら男皇子をと誰しも願うて居りますが、女皇子やら男皇子やら今の中から判りませぬ。

女房の二　何の其れが今から判らいでか。今日此頃の大殿の御運の強さを御覽じませ。去ぬる長徳の流行病に御兄君はお二人ながらお薨れ遊ばし、又御甥の内大臣伊周様や中納言隆家様は大宰府へ流され給うたに、大殿ばかりは愈々榮え時めかれるではござりませぬか。この勢では必定男皇子が御誕生遊ばすでござりませう。

女房の一　さうなれば願うたりかなうたりでござりますが、お家の榮華が目ざましいにつれて、妬み羨む人達の呪咀禁厭も多いわけ。それ、いづぞや承香殿の女御様は、御産の時に物怪に強う祟られて、淺ましい、皇子とも何ともえたいの知れぬ水のやうなものばかりを、お産みなされたと云ふ事ではござりませぬか。

女房の二　えゝ、まあとんでもない。其のやうな不吉な事は仰しやりますな。

女房の一　でもあの昨夜から、生靈死靈の乗り移つた女房達の、罵り叫ぐ言葉をお聞きなされましたか。

其れはく^{またじり}皆をつり上げ、髪を振り亂し、眞蒼になつて後の宮や大殿の御身の上を呪ひ叫ぶ様子と云つたら、身の毛がよだつやうでござりまする。

女房の二　どれ程強い惡靈でも、大殿の御威光や、修驗者たちの法力には、抗はぬ事でござりまする。そればかりか後の宮の御體の内には、やがて日本の天下を知ろし召す、帝の玉體がお宿りなされてござりまするもの。

女房の一　したが後の宮や大殿を、御母上御祖父にお持ち遊ばして、御誕生遊ばす日の皇子の、前世はどんなであつたやら……

道長の息藤原頼通、下手より現れる。當年十七歳の男盛り、元氣よき聲にて、「此の殿はうべも富みけり、さきくさの、あはれ、さきくさの、はれ、さきくさの、三葉四葉の中に、とのづくりせりや、殿造りせりや。」と歌ひつゝ庭中を歩み來る。

女房の二　若殿で居らせられまするか。

頼通（勾欄の下に近寄り、女房を見上げながら）おゝ女房達か。や、其方は今迄いぎたなく居睡りを致して居つたと見える。

女房の二　何と仰せられます。又お^{たぶ}翺り遊ばすのでござりませう。

頼通　でもあの末摘花のやうに、鼻の端を赤くして、普賢菩薩の乗物に似て居るではないか。あはゝゝゝ。

女房の二、周章で、鼻を袖にて隠す。

頼通 して、其方達は其處で何を致して居るのぢや。

女房の一 あまり局の中が苦しうござります故、暫く朝風に吹かれうかと存じまして。

頼通 うむ、麿も昨夜一夜御産屋に侍らうたが、どうやら睡うて堪へられず、睡氣ざましに築山の紅葉を見ながら、逍遙して参つた。どうぢや、後の宮には未だ御産の御景色は見え給はぬか。

女房の一 はい、何分にも数々の、御物のけの悪靈が、容易に退散致さぬ様子でござりまする。

女房の二 されば大殿には御坊たちと諸共に、法華經を一心不亂に誦んじ遊ばし、殿の上にもいつになく、御眼に涙を浮ばせられてござりまする。

女房の一 若殿も早う御産屋へ入らせられて、御父上と御一緒に、御念誦遊ばしたが宜しうござりまする。

女房の二 若し男皇子が御誕生遊ばして、やがて帝とならせ給ふ曉には、若殿も帝の御叔父君とて、天下に御威勢を張らせ給ふことでござりませうが。

頼通 いや、其れよりは、麿は近々に妻を娶つて、美しい后がねの姫を儲けるわよ。

女房の一 おほゝゝゝ。それはおめでたう存じまする。そして若殿をお婿取り遊ばすのは、何れの姫君でござりまする。

頼通 麿が戀人は誰ぢやと思ふ。中てゝ見い。

女房の一 それを妾共が存じませぬ事か。あの具平の親王の一の姫宮でござりませうが。

頼通 いや、いや。

女房の二 おほい、い。若殿とした事が、今更お隠し遊ばしても詮ないこと。

女房の一 早う大殿のお跡をお繼遊ばして、攝政關白の御位に經上りたまひ、下につながる妾共まで御威光にあやか事が出来ますやう、今のうちからお願ひ申して置きまする。

女房の二 嘸似つかはしい攝政關白におなり遊ばすことでござりませう。

頼通 したが、麿の女が入内して、可愛い皇子を産ませらるゝ頃ほひには、其方達はもう老い惚けて、十九の姫となり申すわ。

女房の一 あれまあ、又してもお口の悪い。随分と命丈夫にながらへて、御榮えの末々までも、お眺め申し上げたう存じまする。

鶏鳴兩三聲、四面いよく明るなる。

頼通 もう曉になつたやうぢや。どれ、隙つぶしに女房達の局へ參つて、紫式部に源氏の物語でも聞かうかよ。

女房の二 もし、若殿、あんまり日本紀の局殿（紫式部のあだ名）へお親しうなされますな。たとへ骨肉の

おん仲でも妬み嫉みはよくある事。

頼通 はて、其れは何故にな。

女房の二（小聲になり）それでは御存知遊ばしませぬか。大殿にはどうやら彼のお局殿へ、人知れず思ひをお寄せなされてゝござりまする。

頼通 ほう、これは耳寄りな。はて、さて、内の大殿は、父上ながらいみじき好色であらせられるわい。

女房二人 おほ、い、い、い。

頼通の弟、や、君（後の教通にして、當年はいまだ十三四歳の童姿）妹威子（八九歳、後の後一條天皇皇后）の兩人、少納言の乳人に手をひかれ、末の妹嫁子（三四歳、後の後朱雀天皇皇后）小式部の乳人に抱かれて、廊殿の簀子傳ひに出て来る。

せや君 兄上、兄上、どのやうな皇子がお生れなさつた。

頼通 や、皆參つたか。まだ御誕生の御景色がない。

少納言 それはく。きついお悩みの御様子と見えました。

女房の一 さればでござりまする。先刻妾共が御産屋を退り出づる頃ほひは、おん物怪の勢凄じく、諸山の御坊陰陽師の方々、念力を凝めて一心不亂にお祈りの最中であつた。

小式部 さりながら、御物怪のねたみそねみは、畢竟御立派な男皇子の御誕生遊ばす瑞祥と申すもの。

威子 兄上様、妾は御産所の様子が見たうてならぬ程に、伴れて行つて下されや。

少納言 幼い方々は、御産所などへ入らせられるものではござりませぬ。

小式部 局へお出で遊ばして、兄上様と御一緒に繪卷物など御覧じませ。

威子 妾も早う後の宮になりたいものやなう。

少納言 其のお氣遣ひには及びませぬ。仰せがなうても必らずお父上が后におさせ遊ばすでござりませう。

道長の聲（寢殿の中より）これ誰ぞである。格子を残らず取り拂うてくれい。

女房多勢の聲（寢殿の中より）畏りました。

皆々立ち上りて、殿上の上下の格子を悉く取り外す。寢殿（寢殿は南面せるものと知るべし）には、僧侶、陰陽師、修驗者、達十人、北向きに各壇上に坐を構へて、或は護摩を焚き、或は經を讀み、專念に加持祈禱す。東側には、上達部殿上人、上臈中臈の女房達、老いたるも若きも立錫の地なき迄に入り交り、僧侶の讀誦につれて數珠つまぐりつゝ、一齊に額（おこ）をつく、御産所に宛てられたる母屋は御簾垂れたれば見えわかず。西の廊殿の局には、大威德明王の軸の前に護摩壇を据ゑて、一人の大徳類に護摩をたく。

左大臣道長、歳の頃四十前後の大兵肥滿の男、隻手に數珠を持ちて寢殿の簀子に立ち出づ。

威子 あれ、父上様が見えられた。

せや君 おゝ、父上、まだ御産はござりませぬか。

兩人道長の傍に馳せよる。

道長（兄妹の頭を撫で、微笑みながら）和子達（わこ）はいつの間に參つたのぢや、いまだ御誕生遊ばさぬ程に、靜に致して居るがよい。

威子 父上様、いつ妾を后にして下さります。

道長 ほう、面白いことを申すなう。大人しうしてさへ居れば、やがて后にして進ぜよう。

威子 でも二人の姉上様が、帝や東宮様のお后にならしやつたからは、妾を后に持つお方がござんせぬ。

道長 あはゝゝゝ、その氣遣ひには及ばぬ事ぢや。

威子 それでは、今度男皇子が御誕生なされたら、其方様（そなたさま）の后にして下さりませ。

道長 ふむ、宜し、宜し、幼うても其方は中々賢い娘ぢや。其方のやうな姫達を數多儲けた此の父（てい）は、いみじき幸福者（しあはせもの）ぢやわい。

宮の大夫齊信、母屋の御簾を排して現れ、庇間の群衆を分けつゝ、倉皇として道長の許に馳せ来る。

齊信 大殿へ聞え上げまする。

道長 おう何事ぢや。

と云ひつゝ、子供の手を振りほどきて、心配さうに齊信を見る。

齊信 もはや程なく御誕生あるべきなれど、何様おん物怪に遮へられて、いみじき御悩みの御様子故、萬々一の事ありてはと、観音院の僧正がすゝめに従はせられ、御頂の御髮落させたまひ、御受戒遊ばす所にござりまする。

道長 なに、御戒言を受けさせらるゝか。

齊信 はゝッ。唯今僧正が受戒の詞を讀み上げられまする。

列み居る僧俗一同、讀經をやめて謹聽する時、母屋の中にて僧正聲高らかに受戒の詞を朗讀す。

僧正の聲 あはれ鳳曆は霜幾くならず、玉顔も浪末だ浸さずおはしますを、菩提の御意の發し給ひけるこそは、貴きものから、悲しくぞ覺えける。髻を自ら落し給ひし悉達太子の昔を思ひやれば、檀特の山は跡暗うして、見て、悲しむ人少くこそありけれ。戒を人に受け給へる、國母の今を見奉れば、日本の國は舉りて恩を借む繁かりけり。いでや今日こそは五戒を悉く持ちおはしませ。苔を穿たぬ輕きおん歩み、蓮にうけて傾かず候ふ可かりける。千葉花臺の舍那、百億蓮葉の釋尊、諸共に百年の戒を守り給ひて、九品蓮に昇り給へ、聞き給へ。御功德限あらず。法界の衆生迄普く及ばむ。

道長 大夫、あの僧正の詞を聞かれい。まだうら若い御身空で、畏くも、いみじうも思し立たれたりな。

さすが天下の國母と仰がれ給ふ后の宮の、御心勞はまた格別。あまりの忝かたじけなさに、この道長は泣き申した。

齊信 御傷しう存じまする。

道長始め、皆々感極つて落涙す。

せや君 あれ父上がお泣きなされた。

威子 御誕生はおめでたいものぢやと云ふに、父上様始め、皆々何が悲しいかや。

道長 さうぢや、さうぢや、不吉な涙は流すまい。どれ、父も御枕邊に侍つて、法華經を誦ずんじ申さう。

和子達は乳人と一緒に、暫くあちらで遊んで居れ。

兄妹顔きつゝ乳人に伴はれて退場。母屋の御簾しづ／＼と卷き上る。東寄なる濱床に帳臺を据ゑ、御産婦の中宮（道長の出にして一條帝の中宮たり。御諱は彰子、上東門院と稱せらる）南枕に肩疊をあて、打ち臥し給ひ、今しも餘慶僧正、剃刀を以て御頂の御髪をはんのわづかばかり剃り落す。（剃り落されたる後は、東北南三方の帳を低く垂れて、濱床を隠し奉り、幕の終る迄中宮の御姿は帳の中にありて見えざる事とす）帳臺の東側には、産棚、おし桶、胞衣棚を置く。帳臺の西、御枕許には、道長、餘慶僧正と共に法華經を讀み、道長室倫子、年老いて物馴れたる女房、三人居列びて、御産婦の介抱につとむ。其のうしろ、北側の壁に沿うて立て連ねたる屏風の前に、物怪、惡靈の乗り移りたる招人の女房五人、髪振り亂し、眼中血走り、夢中になりて何やら口早に罵りつゝ荒れ狂ふ。修驗者數人、物怪の一群を圍繞とりまきて、鈴うちならし、呪文を唱へ、頻に怨敵退散の祈願を凝らす。

招人の一（暗くら殿べ女御惡靈） あな妬ねや、咀のろ々しや、妾こそは粟田關白が女、御匣殿の生靈なるぞや。暗部屋の暗きに翔る百羽の鳥、千羽の鳥。あれ、あれ、あの新しき命の芽生を、葉ごと枝ごと、啄め、啄め、

啄み盡せや根もとまで。あな妬や。のろ／＼しや。

招人の二（承香殿女御惡靈） 笑止、笑止、をこがましくも負氣なくも、天津日嗣の皇子産まむとや。生るゝものは水ばかりぢや。水ぢや、水ぢや。それ、臭あい、穢あい、尿のやうな水ばかり、體の内から直流れに流れ出づるぞい。其のやうに水が出ては、手も脚も腹も胴も、枯木のやうに縮んでしまふぞ。笑止、笑止、あは／＼／＼。

招人の三（顯光惡靈） 憎みても、憎みても、憎みても飽き足らぬ。いとしき女の女御が敵、いとしき女の婿が仇。見よ／＼怨念積んで一夜に生きながら白髮の鬼と化し、死しては魔界の王となり、汝が族の末々迄も、屠り散らして、骨をしやぶり血をすゝらむ。

招人の四（道隆惡靈） われは中關白が亡靈なり。運拙くして長徳の世の疫病に、陰府の人となりぬる口惜しき残念さ。おのれ弟の分限にて、小童の昔を忘れ、ようも、ようも、二人の兄を凌がうと企つるよな。わが孫宮の一の宮を帝に立つる誓言せずんば、いつまでも頭に御産屋の邪鬼となつて祟らうぞ。誓言せい、誓言せい。一の宮を帝に立つる誓言せい。

招人の五（高明惡靈） 億兆の國民の膏血をすゝり、邪曲を扶け、正義を虐げ、天下に荊棘の苦を負はす驕慢の人の子。子を持てる親、兄を持つ弟、夫持てる妻に、猜疑と、嫉妬と、嫉妬と、瞋恚の炎を焚きつくる驕慢の人の子の命を宿す女を咀はむ。かく云ふは、去ぬる安和の年、罪なうして大宰府の權帥に貶されし、西の宮の高明なるぞや。

惡靈共口々に「咀々しや」「憎らしや」「妬ましや」など云ひつゞける。此の間に寢殿は素より、東西廊殿の簀子に迄